小部族にもこれに關する記事はあるであらうし、また時代についても更に古に溯り得ることが出來るかとも思ふが、今の自分には以上の抄出に止めなければならぬ次第である。尤も巫といふ文字は見えなくても、必らず巫と關係のあつたものと思はるゝト筮に關する記事などはまた諸書に見えて居る、その中で古い時代の二三の例を擧げると、吐谷渾の父なる慕容涉歸なるものがト筮の言を信じたことが記され、[11] 高車でも解律部の首長なる侯倍利が、善く五十蓍を用ゐて吉凶を筮したことも見えて居る。[12] これ等の記事に關連して思ひ出さるゝのは、ヘロドタスの記して居るスキタイ民族の巫ト[13]のことである、此の民族が如何なる種類に屬するものであるかは、今明らかに定め難いとしても、その生活狀態や風俗習慣に於ては、こゝに題目とした北方民族と酷似して居るものである以上、この記事は匈奴などの巫について漢史の記する所と參考して、なほ遙かに上代から北方民族の間にも巫の存在したことの推測に資し得るものであると思ふ。

三

前に述べたやうに巫は古來北方民族の間に通有のものであるが、彼等の存在は要するに未開の人間が其の低級の知識に於て不可解の事件に遭遇する時に、これを通じて神の垂示を得やうとするに因るものであるから、巫は神を呼び出して自分に憑依せしめ、一々之に解決を與へてやるのが務めであつて、此の際巫の言ふ所は勿論神のいふ所に外ならぬのである。そうして此等の民族の巫を信ずることは非常に厚かつたもので、それも彼等の間の一部分のものゝ信仰ではなく、上は君長から下は一般のものまで總べて同樣の狀態で、大小ともに考慮を要することは、み